

明治学院歴史資料館

News Letter

No.16

2024

目次：

- 1 巻頭言 企画展「〈楽譜〉でたどる北村季晴の音楽世界」をめぐって / 長谷川一（歴史資料館館長、文学部芸術学科教授）
- 2 蘇った「音の情景」 / 加藤拓未（音楽学者）
- 3 修復の概要 / 加藤万梨耶（オルガン製作者）
- 4 教職専門演習における「歴史資料館等の施設見学」の事例 / 石井久雄（文学部教職課程教授）
- 5 日記・明治編に見る井深梶之助と大磯 / 細井守（特任研究員）
- 6 “裏”のある資料 / 眞島めぐみ（特任研究員）
- 7 2024年度博物館実習 / 亀元円（学芸員）
- 8 明治学院歴史資料館2024年度主な活動、その他

巻頭言

企画展「〈楽譜〉でたどる北村季晴の音楽世界」をめぐって

長谷川 一（歴史資料館館長、文学部芸術学科教授）

明治学院歴史資料館では2024年10月より「〈楽譜〉でたどる北村季晴の音楽世界」と題した企画展をおこなっています。おかげさまで学院内外から多くの来館者を得、好評をいただいております。

北村季晴（きたむら すえはる、1872-1931）は、明治から昭和初期に活躍した近代日本音楽のパイオニアのひとりです。1887（明治20）年に明治学院普通学部第一期生として入学、同窓の島崎藤村とも親交を結びました。東京音楽学校師範部へ進み、1899（明治32）年に長野師範学校へ教諭として赴任。翌年作曲した『信濃の国』（作詞：浅井洌）は長野県歌として今日まで歌い継がれています。作曲家・演奏家として和洋調和楽の普及をめざした北村は、『長唄楽譜』や『邦楽全集』などを制作しました。みずから作詞・作曲・演出を手がけた御伽歌劇『ドンブラコ』（1912）は、宝塚少女歌劇の第一回演目（1914）にも採用されています。唱歌や児童歌劇など「子どものための楽曲制作」にとりくみ、1927（昭和2）年には北村児童歌劇協会を設立するなど、その功績は多岐にわたります。北村の、まさに音楽に捧げた生涯を紹介しつつ、その豊かであたたかな音楽世界に触れていただきたい——。本企画展の構想は、そんな思いからはじまりました。

展示の目玉は当館が所蔵する楽譜等の現物資料で、パネルと有機的に連動するよう工夫を凝らしています。たとえば「子どものための楽曲制作」を紹介するコーナーでは、パネルの説明で知識を深めつつ、『鈴虫の鈴』、『人形病院』、『ピョコ太郎』などの楽譜をじっくり鑑賞していただくことができます。表紙や挿絵など、たとえ読譜できなくとも、見ているだけで楽しい造りです。版ごとに異なるデザインを見比べるのも興味深いでしょう。楽譜の現物展示だけでなく、二次元バーコードをスマートフォン等で読み込めば実際に音源（当館特任研究員による演奏）を試聴することもできます。

これら工夫を可能にした背景のひとつに、歴史資料館の体制がすこしずつ整ってきたことがあげられます。

たとえば学芸員の配置です。じつはほんの数年前まで、当館には学芸員資格をもつスタッフがひとりも在籍していませんでした。そもそもポスト自体がなかったのです。

ミュージアムにおいて展示は業務全体の一部分にすぎません。展示は資料の収集・保管・整理・研究などと分かちがたく結びついているからです。そうした多様で複雑な業務を一定の水準で継続的に遂行してゆくには、専門的な知識と経験をもつ学芸員の存在が欠かせません。さいわいにも学院長室や法人事務局をはじめ関係各位のご尽力で、2020年度より、まずは特別嘱託という形で学芸員1名をおくことができるようになりました。創意に満ちた今回の企画展の実現も、こうした改革の地道な努力があったからこそと、わたしは考えています。

もちろんこれはひとつの通過点にすぎません。人員、体制、予算、展示室の改善や収蔵庫の確保など、課題は依然、山積しています。こうした課題をひとつずつ解決してゆく先にしか、歴史資料館の充実と発展はありえない。そして、明治学院の歩みが、たんなる一学校史にとどまらず、日本のキリスト教史や近現代史のなかで枢要な位置を占めるものであるのなら、当館の果たすべき役割もまた相応に大きく多様であるにちがひありません。

ご紹介した北村季晴展は、白金キャンパス記念館1階の展示室にて、2025年1月14日から一部資料を入れ換え、第二期を開催しております（4月18日まで）。お運びをいただけますとさいわいです。



〈楽譜〉でたどる北村季晴の音楽世界 展示風景

蘇った「音の情景」——明治学院のリストオルガン

加藤 拓未（音楽学者）

2024年10月19日に開催された歴史資料館の講演会は、現在、本学院記念館の2階に設置されている「メイソン&ハムリン社製のリードオルガン」を取り上げたものでした。このリードオルガンは、19世紀後半に活躍したドイツの作曲家フランツ・リスト（1811～1886）が評価した楽器であることから、通称「リストオルガン」と呼ばれています。長らく記念館の片隅に「鳴らざるオルガン」として安置されていましたが、この度、横田宗隆オルガン製作研究所の修復によって、再び音色を取り戻し、いにしへの響きを蘇らせました。

■明治学院の「音の情景」

明治学院のリストオルガンは、1914（大正3）年11月初めにアメリカの教会から寄贈されたもので、当時はサンダム館の2階に置かれました。ところが、ひと月も経たないうちにサンダム館で火災が発生し、このリストオルガンも焼失の危機にさらされたのですが、5人の学生が2階からオルガンを引きずって下ろし、それを防いだそうです。その奇跡の救出劇の様子が『明治学院五十年史』（1927年）に伝えられています。その後、1916（大正5）年3月、サンダム館跡に現在の白金チャペルが献堂され、リストオルガンはチャペル正面の壇上左側に設置されました。

当時の明治学院でリストオルガンが、どのような形で使用されていたのかと言いますと、まずチャペルの礼拝における奏楽のための楽器として使用されました。つまり、礼拝の前奏や後奏を弾いたり、礼拝出席者が賛美歌を歌う際の伴奏を弾いたりしたのです。また、大正時代から昭和前期にかけて明治学院では、チャペルで音楽会が頻繁に開催され、学生たちによる男声合唱の伴奏楽器としても用いられたほか、独奏楽器として、J.S.バッハの《トッカータとフーガ 二短調》BWV565なども演奏されました。このようにチャペルから聴こえてくるリストオルガンの柔らかくやさしい音色こそが、当時の学生たちが、日常で耳にする、いわば「音の情景（イメージ）」だったのです。

■音の情景の蘇り

この当時の「音の情景」は、現在の明治学院のそれとは異なっていると言えます。たとえば、1928（昭和3）年から1944（昭和19）年まで、明治学院で音楽主任として毎日の礼拝の奏楽を行った安部正義（1891～1974）は、次のような文章を残しています。

「私が十七年間毎朝の礼拝や音楽教授をしていた頃は、ステージは狭苦しくポロピアノ1台とメーソン&ハムリン製のペダルリードオルガンだけ。それにこのオル

ガンを弾くにはその後（うしろ）に小使（こづかい）君が腰掛けていて、よく居眠りをしたものだ。弾き始める前には、予めこの小使君の頭をちょっとなでておかないとポンプ押しに間に合わない。少し長い曲を奏でるとハーハーと息切れの音が気になった。（中略）今度久しぶり（筆者注、1966年）に訪れてみてキャンパスは勿論の事、昔懐かしいこのチャペルの内部は夢にも考えられなかった最新のパイプオルガンの壮観、ステージその他の近代化に今昔の感に堪えなかった。」（『明治学院同窓会報』第16号）

1966（昭和41）年2月、チャペルに明治学院創立以来、はじめてのパイプオルガン（ヴァルカー社）が完成し、この奉献式に参加した安部正義は新しく生まれ変わったチャペルの姿に大いに感銘を受けたようです。当時、ステージいっぱい広がった、そのパイプの列はまるで「天使が翼を広げているようだ」と謳われました。と同時に1966年以降、明治学院のチャペルから聴こえてくるのは、パイプオルガンの壮麗な音色で、これが新時代の明治学院の「音の情景」となったのです。

このヴァルカー社のオルガンも、すでにその歴史的生命を終え、「天使の翼」を思わせるパイプの一部は、記念館2階のリストオルガンのそばにモニュメントとして展示されています。そして、現在、チャペルから聴こえてくるのは、2009（平成21）年10月に設置された新しいパイプオルガン（ヘンク・ファン＝エーケン製作）です。これは、リストオルガンから数えて三代目のオルガンにあたり、現在の明治学院の「音の情景」を紡いでいます。

今回の楽器修復によって、再びリストオルガンの音色が戻り、大正・昭和前期の明治学院の「音の情景」が蘇ってきました。現在のパイプオルガンと比べると、その音色や音量は、穏やかで小さく感じるかもしれません。しかしながら、これが大正・昭和前期の明治学院の音の世界だったのです。当時の先輩方が、この音色・音量のなか、礼拝で祈りを重ねていたことを思い出すと、こうした音の歴史遺産を伝えゆくことが、当時の学院の歴史を伝える上でも重要なことではないかと思っています。

加藤 拓未（かとう たくみ）

音楽学者。博士（芸術学）。専門はバッハを中心とするドイツ宗教音楽史。明治学院歴史資料館研究調査員、同百五十年史編集委員を歴任。著作に『バッハ・キーワード事典』『バッハ・古楽・チェロ』など。現在、聖心女子大学講師、明治学院大学キリスト教研究所協力研究員。NHK-FM「古楽の楽しみ」に解説者として出演中。

本稿は2024年10月19日（土）に開催された明治学院歴史資料館講演会「明治学院リードオルガンの響きとこれから」にて講師を務めた加藤拓未氏、加藤万梨耶氏にご執筆いただきました。また、講演会当日は本学オルガニストである原田真侑氏に「赤とんぼ」「椰子の実」、セザール・フランク作曲「カンタービレ」など7曲を演奏していただきました。この場を借りて、ご協力くださいました皆様に心より感謝申し上げます。

修復の概要

加藤 万梨耶（オルガン製作者）



修復後のリードオルガン

このリードオルガンは1912年製、大型で二段鍵盤とペダルを持つ。

製造元のメイソン&ハムリン社は、19世紀後半から20世紀初頭にかけて世界でも有数のリードオルガンメーカーであった。リードオルガンは『フリーリード』という発音原理の真鍮リードを用いる。柔らかな発音、音量の変化によらず安定したピッチ、共鳴管を必要とせず小さいスペースで広い音域をカバーできることが特長である。19世紀以降の音楽とこの優しい音色はよく合い、リードオルガンは欧米で爆発的に流行していたのである。

この楽器は1914年に明治学院に到着してまもなくのサンダム館の火事を無事に生き延び、長きにわたり礼拝奏楽に用いられた。しかし60年代に礼拝堂に初代パイプオルガンが設置された後は不遇の時代となる。80年代頃からは『鳴らざるオルガン』として校内に保存されていたようである。1997年に仁平利三氏によって修復がなされ、2014年に港区の指定有形文化財となった。しかし、筆者らが修復のため2018年に楽器を調査してみると、鳴らない音、鳴りっぱなしの音、調整の狂ってしまった箇所などが多々あり、本来あったはずの部品の散逸も次々発見された。

それを踏まえ、明治学院、港区教育委員会事務局図書文化財課担当者、弊社の3者にて、修復の方針を確認した。博物館の所蔵品であれば、「保存」を第一として、手を加えることは貴重な現資料を損なうという考え方もありうる。しかし、このオルガンの場合は「活用」を前提としている。外観だけでなく、奏でる音や、運用されてきた歴史も含めての史料価値だ。修復工法の選定にあたっては、この楽器の製作者自身が当時の技術で修理するとしたらどうするか、という観点から判断した。次世代のため、修理修復について詳細な記録を作成した。

また、交換部品がある場合、取り外したものを保管する方針を取った。

内部を詳細に見ていくと、無垢の木材と革やフェルトなどを用いた伝統的なパイプオルガン製作を基にしながら、それを徹底的に合理化して製作されていることがよくわかった。20世紀初頭の「手工芸的大量生産技術」の水準の高さを象徴している。演奏者の指がもたらす鍵盤の動きは、木製のアクション（からくりのような可動部品）で物理的に伝えられて弁が開き、風がリードに通る仕組みである。この設計が素晴らしく、限られた空間に非常に合理的で複雑なアクションが収められている。リードオルガンの状態からは、学院の中で大切に保管され、時代が移る中で静かに朽ちていったような印象を受けた。空気漏れ止めの革やフェルトの貼り替え、動きの微調整、破損の修理などを、時代背景や演奏美学を考慮して行った。

このオルガンは574枚のリードを持つが、うち24枚は他社製に交換されていた。おそらく紛失や破損が生じたのだろう。これらは音色の性格を乱す一因となっていた。また、19個あるストップノブ（演奏者が音色を替えるための木製ツマミ。正面にストップ名が記載されている）は、多くがオリジナルを欠いており、正しいストップ名は不明であった。製造番号から該当する当時のカタログを調べ、ストップ名を検証した。これらのリードやノブについては、オランダのリードオルガン修復家の協力を得て当時のオリジナルを取り寄せ、交換した。

手動送風装置は、戦後いつかの時点で電動送風装置をつけた際に取り外され、散逸してしまったらしい。鉄製の大きなテコのついたふいごで、オルガンの側面から手動送風レバーを上下させるとオルガンに送風できたようだが、今回の修復では、復元することは叶わなかった。これは将来に託したい。

加藤（拓）先生の講演、原田先生の演奏のおかげで、20世紀初頭の豊かな明るい音色を楽器の歴史と共に体感する貴重な機会であった。ご来場いただいた皆様、主催の歴史資料館の皆様にご挨拶申し上げます。

加藤 万梨耶（かとう まりや）

東京大学人文社会系研究科修士課程修了後、オルガン製作の道に入り、横田宗隆に師事。スウェーデンと日本での修行期間に、ヨーロッパの歴史的楽器を多数訪ね、見聞を深めた。現在、横田宗隆オルガン製作研究所勤務。2019年に実施された明治学院所蔵メイソン&ハムリン リードオルガン修復プロジェクトでは、横田宗隆の下で修復チームのリーダーを務めた。

教職専門演習における「歴史資料館等の施設見学」の事例

～対話、実物重視の案内～

石井 久雄（文学部教職課程教授）

3, 4 年生対象の教職専門演習の授業で歴史資料館等の施設見学を初めて行ったのは、2022 年 5 月です。コロナ禍が終息を迎え、2022 年度から対面授業がやっと再開したので、これまで自宅に閉じこもっていた学生を外に連れ出し、いろいろな体験をさせようと思いついたからです。施設見学の当初の目的は、教職を履修している学生に、引率する力を育成することでした。中学校・高校の教員には、遠足や修学旅行等で、生徒を学外へ引率する仕事があります。そこで、目的地を歴史資料館にして、学生の地元から中高生を引率する計画を立てさせることを目的としました。施設見学は、概ね以下の流れで行われました。第 1 に歴史資料館で展示物の説明を聞く。第 2 にチャペルの説明を聞く。第 3 にインブリー館で資料等の説明を聞く。このように記述すると、なんの変哲も無い施設見学です。しかし、歴史資料館職員の小杉義信さんの案内により、施設見学に広がりや深まりが加わるようになります。

小杉さんの案内の特徴は 2 つあると感じています。一つ目は、学生との対話を重視することです。展示物等の説明を一方的にするのではなく、学生に質問をしたり、感想や意見を聞いたりして、対話をしながら案内していきます。このような案内は、突然質問をされるので最初は学生は惑っていますが、しばらくすると慣れてきて、途中から学生はより積極的に発言するようになり、展示物等の理解が深まっていきます。二つ目は、実物に触れさせることです。例えば、インブリー館の 2 階の窓を学生が実際に開けて、在りし日の宣教師の気持ちを追体験する。屋我良明氏のパスポートを実際に手に取り、外国だった沖縄に思いをはせる。屋根裏に登り火災で炭化した梁を実際に触り、歴史の保存について考える、といったことです。特にパスポートに触れるときは、貴重な資料だけに、学生は目を見開き、食い入るように覗き込んでいきます。

こうした小杉さんの独特な案内は非常に面白く、古い歴史的資料が、生き生きとよみがえってくる感じがします。そこで、2023 年度からは、施設見学の目的は、歴史資料館等そのものを深く理解する方向に変更しました。具体的には、次の通りです。①母校を知る。明治学院大学の歴史を知る。②日本の近現代史を学ぶ。明治学院大学の歴史は、明治以降の日本の歩みでもある。③社会史を体感する。当時の人々の気持ちや暮らし等を身近に感じる。④中学校・高校での授業に活かす。教材研究をする。

最後に、2023 年度に施設見学に参加した学生（6 名）の感想を一部紹介します。目的の①に関しては以下の通りです。「初めて歴史資料館に行き、今まで何となく通っていた大学だったけれどとても深い歴史があることを知り、知れば知るほど面白いと感じた」。「学校の授業ではただ単に教科の知識を教えるだけでなく、その学校の歴史や変遷を学ぶことで、学校での学びがより面白いものを感じられると思った」。②、③に関しては以下の通りです。「インブリー館で職員の方に、沖縄占領時代のパスポートや留学に関する書類を見せていただき、戦後史についてこれまで自ら深く考えていなかったことに気付かされた。また、その時代に生きていた先人たちの目線に立つために、資料館のような施設があることを再確認した」。「まず自分が普段何気なく通り過ぎている建物の中に歴史を感じることができ景色が広がっていることを知れてとてもよかった。インブリー館の窓から見た景色はまるで海外に行ったかのような感じ、窓を開けたときはとても気持ちが良かった」。④に関しては以下の通りです。「今回印象的であったのは、歴史的なものに対して実際に肌で触れることができたことです。文化財の建物に実際に入り窓を開けることや、戦後に発行されたパスポートを手で触れることは現代においてあまり体験できない貴重な経験でした。教科書やノートだけでは教えられることがたくさんあると実感し、これから社会科を教える身として、生徒が本物に触れる大切さを大事にしようと思います」（卒業後に中学校社会科の教員になることが決まっている学生）。

2022 年から始まった施設見学は、今年度で 3 回目となりました。貴重な経験をさせていただき、小杉さんには深く感謝しております。今後とも続けていきたいと思っています。



授業の様子（2023 年 10 月 24 日）

日記・明治編に見る井深梶之助と大磯

細井 守（特任研究員）

神奈川県の大磯と言えば、明治学院出身の文豪・島崎藤村の永眠の地として有名ですが、明治学院二代総理で日本基督教会の指導者であった井深梶之助にとっても、「思い深い」地でありました。

明治学院では、2024年3月31日、井深梶之助生誕170年を期して、歴史資料館とキリスト教研究所との協働プロジェクトとして、『井深梶之助日記 明治編』（以下、日記・明治編）を刊行いたしました（大正編、昭和編を続刊）。

そして、日記には何度も「大磯」の地名が登場します。

「四月一日（水） 雨 （中略）」

午後十一時五十二分、おせき同道品川出発、午後二時半、大磯町角半屋半右衛門ノ離レ家ニ投宿ス。閑静ニシテ諸好都合ナリ。

四月二日（木） 半晴

午前、大磯町内ヲ散歩シ、小山ニ上リ四方ヲ眺望ス。午後、再ビ海岸ニ出テ、散歩ス、風静海青沙白、氣自ラ平ナルヲ覚ユ。大磯ハ病氣保養ニハ最上ノ地ナリ。おせき入院中訪問シタル人々ニ礼状ヲ出ス。」

（日記・明治編、103頁、1896（明治29）年）

井深は、はじめの妻、水上勢喜子（せきこ、日記文中「おせき」と1880（明治13）年に結婚していますが、この日記が記された2年後の1898（明治31）年3月21日に病気のため亡くなり、日記・明治編には勢喜子の闘病とそれを気遣う井深の感動的な日記が綴られています。

さて、大磯の地は、温暖な気候により保養地として注目され、ドイツ人医師ベルツ（1849年～1913年。明治時代に日本に招かれたお雇い国人のひとり）より紹介されていた海水浴を普及させるための適地を探していた陸軍軍医総監松本良順により1885年に海水浴場として開かれた所です。海岸ぞいの東海道大磯宿の街並み中には、名勝の鳴立庵があり、数々の旅館・料亭が並んでいました（相陽大磯駅全図〔1888年〕参照）。井深も妻の病氣保養場所として宿内茶屋町の旅館「角半（角屋半右衛門）」を利用しました。

地図中、①「角半」の西側には鳴立川を隔てて②「鳴立庵」があり、反対東側の街道の北側には、1890年に同志社の新島襄（1843年～1890年）が静養中に亡くなった旅館③「百足屋」（図「ムカデヤ旅店」）があります。また、同時代の文学者高山樗牛（1871年～1902年、平塚市内の病院で死去）も「角半」で療養していました。

前妻・勢喜子没の翌年（1896年）、井深は大島花（はな）を後妻に迎えました。そして2年後の1898年、井深は再び大磯の角半旅館に足を向けています。

「五月一日（日）」

浜松ノ旅館騒擾甚シ。因テ更ニ閑静ノ地ヲ求メ午前五時四十七分同所出発、午後一時大磯角半楼ニ投宿ス。一昨年ノ今月今日ハ、愛妻ノ病全快シタルヲ以テ当地当楼ヲ辞シテ、途次江ノ島ヲ見物シテ帰京シタル

ノ日ナリ。今年今日ハ独身大磯ノ海上ヲ望ミテ、無限ノ情アリ。

思ヒキヤ、テニソン卿ノ詩

Break, Break, Break,

On thy cold gray stones, O Sea!

And I would that my tongue could utter

The thoughts that arise in me!]

（日記・明治編、243頁、1898（明治31）年）

井深の二度めの結婚式は1900年の1月9日でした。

「一月十日」

半角楼ノ一室ヲ借受ケ、唯二人共ニ楽シク此日ヲ送ル。但天気ハ昨日ノ如ク快晴ナラズ、寒氣強シ。由テ終日室外ニ出ズ。静カニ既往ト将来トニ付語暮ス。

一月十一日

大風雨ニテ復タ終日在宿ス。寒氣殊ニ甚シ。挙式当日ノ好天気ナリシヲ感謝セリ。終日滞宿シテ、諸方へ披露書又礼状礼電等ヲ発ス。其数百以上ナリ。

一月十二日

前日トハ打テ変リタル快晴ノ天気トナレリ。依テ相携ヘテ大磯町内並海岸ヲ散歩シテ風景ノ美ヲ楽メリ。満山白雪ヲ頂キタル芙蓉峰ノ景色、実ニ美妙ナリ。海上ノ眺モ亦絶景ナリ。

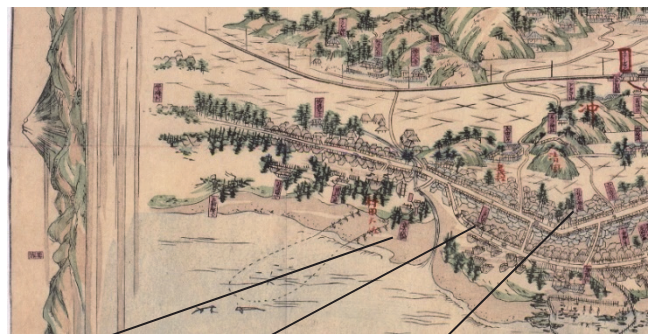
大磯ノ地ハ自然ノ絶景ノ上ニ、又一ノ歴史的紀念ノ地トハナレリ、我等二人ノ為ニハ。」

（日記・明治編、336頁、1900（明治33）年）

婚姻式の翌日、井深夫妻は休養の地として大磯の角半楼を訪れ、2日後の快晴日には町内を散歩して、満山白雪を頂いた芙蓉峰（富士山）の景色を仰いでいます。井深にとって大磯の地が如何に特別な記念の地となっていたか、日記の最後2行に如実に語られています。

日記からは事件や事実の裏付けとなるような内容も知られますが、記者の心の動きを知り、意外な一面を知ること、日記を繙く大きな楽しみの一つです。

『井深梶之助日記』の刊行は、このあと大正編（2025年3月31日）、昭和編（2026年度）と続きます。是非、手に取ってご一読を！



②「鳴立庵」 ①「角半」 ③「百足屋」（ムカデヤ旅店）

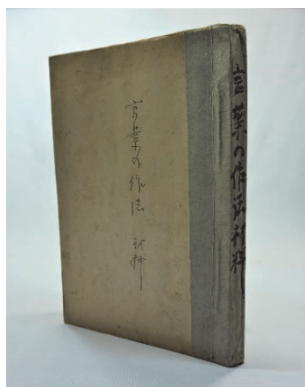
相陽大磯駅全図（部分） 提供：大磯町立図書館

“裏”のある資料

～〈館蔵資料紹介〉沖野岩三郎『言葉の作法 材料』～

眞島 めぐみ（特任研究員）

いざ原稿用紙に向かって書き出したものの、書き損じたり、筆が進まず放り出したりして、用紙が反故になることがある。こうした用紙を「書き反故」「反故原稿」などと言う。「反故原稿」がその後に出る運命は種々様々だが、破られ屑籠に捨てられるなどして、失われてしまうことがほとんどであろう。しかし時に、家族や弟子が大事に保管をしていた場合や、これからご紹介する資料のように、再利用され少し姿を変えて、思いがけず後世に伝えられることがある。

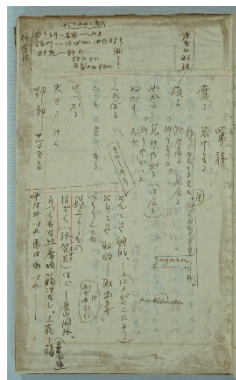


『言葉の作法 材料』
(ID 1201611014)

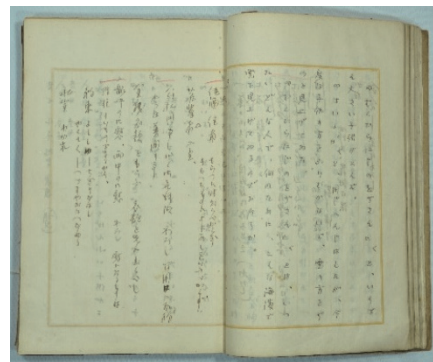
草稿『言葉の作法 材料』は、明治学院の卒業生である作家・沖野岩三郎(注1)が自ら学院に寄贈した原稿・草稿類の一つである(注2)。およそ270枚の原稿用紙の束に表紙・裏表紙をつけて製本されており、自筆の題字に「材料」とあるように、1941年に朝日新聞社から依頼された「言葉の作法」(『国語文化講座第5巻』所収)(注

3)を執筆する際に集めた材料を書き記したものだ。資料前半は、日本語の使われ方に関して沖野が調査・研究をした言葉の数々が並ぶ調査メモで【図①】、これをもとに執筆したと思われる草稿が後半にまとまっている。沖野は戦前から戦後にかけて歴史の研究に注力するのだが、本資料に書き綴られた夥しい数の言葉たちは、研究者としての彼の熱心で真面目な一面をありありと示してくれる。

さて、この資料は重要な側面を持つ。「反故原稿」が裏紙として使われ、別の作品の直筆原稿が隠れている、言わば“表”と“裏”のある資料になっているのだ。“裏”は、沖野によって反故とされた多種多様な書簡と草稿類から成る。中でも大部分を占めるのは、虹と地震の研究家である椋平広吉(むくひらひろきち)を取材し童話としてまとめた『虹のをぢさん』(金の星社、1942・1)の草稿である【図②】。沖野は執筆の際、「書いてあるうちに私の感激はますます高ま」り、時に「涙を拭ひ」ながら「感激に充ちて脱稿」したという(注4)。とはいえ、多くの反故、とりわけ主人公「椋平をぢさん」の登場場面である作品冒頭部分の草稿が何枚にもわたって残されているのだから、「感激」の裏に、作品を書き出す苦悩や脱稿に至るまでの紆余曲折があったのではないだろうか。



【図①】
『言葉の作法 材料』
調査メモ



【図②】左側が“表”『言葉の作法 材料』、
右側が“裏”『虹のをぢさん』草稿
(牛込神楽坂下、山田紙店の200字
詰め原稿用紙)

原稿用紙に注がれた下書き段階の努力や熱意を感じることができるのは「反故原稿」ならではの魅力であり、“表”に負けず劣らず沖野の息遣いを伝える貴重な資料といえる。

当館が所蔵する沖野の原稿・草稿類の中には本資料のように「反故原稿」が使用された“裏”のある資料が多数潜んでいる。この裏側を調査し明らかにすることで、沖野岩三郎研究に一層広く活用され、その人物像や作品のさらなる理解につながっていくはずだ。幸運にも伝えられ、託された“裏”のある資料たちを、もちろん“裏”のない資料も共に、大事に探っていきたい。

(注1) **沖野岩三郎**(おきの いわさぶろう、1876～1956)は、作家、牧師として知られる。和歌山県に生まれ、小学校教員等を経て1904(明治37)年に明治学院神学部に入學。卒業後は牧師となるが、小説や随筆、紀行文、評論、童話など幅広い執筆活動も行う。また作家、或いは牧師として各地で多くの講演を行ったことでも名高い。代表作は、自身も巻き込まれた1910年の大逆事件での経験を題材とした小説『宿命』。

(注2) 沖野は1952年に蔵書や原稿等を寄贈している。現在主に原稿類を歴史資料館が、蔵書類と書簡、一部の原稿を明治学院大学図書館が「沖野岩三郎文庫」として保管している。

(注3) 上記「沖野岩三郎文庫」の『国語文化講座』第5巻国語生活篇(桜木俊晃編、朝日新聞社、1931・12)に、沖野宛の執筆依頼の書簡が貼付けられている。依頼日時は1931年3月、枚数は400字詰め原稿用紙25枚、締切は同年6月15日とある。

(注4) 「あとがき」(『虹のをぢさん』金の星社、1942・1)

2024 年度博物館実習

亀元 円 (学芸員)

明治学院歴史資料館では9月9日(月)から17日(火)まで、6日間の博物館実習を行いました(土、日、祝日は除く)。3名の実習生と当館スタッフによる対話を中心に進められた実習では、学院の歴史、資料の取り扱い、資料保存、デジタルアーカイブズ、展示室の改善点などについて学びました。実習中の写真と共に、カリキュラムを抜粋してご紹介いたします。



9月9日(月)

オリエンテーションを終え、早速「明治学院歴史的建造物について知る・学ぶ」と題した初日の実習が開始。構内にある歴史的3棟(明治学院記念館、礼拝堂、インブリー館)の周囲や建物内を歩きながら、その歴史について学びました。午後は和室に移動し、資料の形態や取り扱いなどを、実際に和装本や卷子本、掛軸に触れて学びました。

9月10日(火)

2日目は文化財の中にある展示室として、害虫の侵入や温湿度の管理など様々な環境的要素の中で展示をつくることの難しさと、文化財が持つ美しい空間で展示することの楽しさについて話し合いました。その後、デジタルアーカイブズにおける、ガイドラインや検索の仕組みなどの講義を受けました。午後は構内を歩き、設置されているモニュメントを通して学院の歴史について学びを深めました。さらに、実際に資料を手に取り、「資料のどの点に関心を持ったか、その理由は何か」などの質問が書かれた用紙をもとに調査をし、調査結果の発表を行いました。



9月11日(水)～13日(金)

3日目の午前中は保管庫へ行き資料をピックアップし、資料劣化の一要因であるホチキスなどの金属製品の除去作業を行いました。

講義を終え、3日目の午後から5日目の午後までは実習生同士、展示作成のための話し合いと調査を進めました。

9月17日(火)

6日目の午前に展示パネルを作成し、午後には「繋がる～礼拝堂から見る明治学院の歴史～」と題した展示の設営が完了しました。最後に、館内スタッフに向けた成果報告と振り返りをし、6日間の博物館実習を終えました。



実習の最終課題である展示は、実習生同士が意見を出し合ってつくります。限られた時間の中で他者と何かをつくるためにはコミュニケーションが不可欠ですが、当館が対話を大切にした実習を行っているのもそのような力を培ってほしいという思いがあるためです。6日間という限られた期間でしたが、今回の経験を今後活かしてほしいと思います。

◆博物館実習成果展「繋がる～礼拝堂から見る明治学院の歴史～」は2025年4月18日(金)まで公開しています。

明治学院歴史資料館 2024年度主な活動

展示

「〈楽譜〉でたどる北村季晴の音楽世界」 2024年10月1日(火)～2025年4月18日(金)

1887(明治20)年9月に明治学院普通学部第一期生として入学した北村季晴(きたむら・すえはる)。音楽の道に進み、作曲、演奏家として和洋調和楽の普及に取り組み、唱歌や児童歌劇など、“子どものための”楽曲制作に生涯をささげました。本展示では、当館が所蔵している楽譜等の北村季晴関係資料をたどること、その音楽世界をご紹介します。

◆第一期…10/1(火)～12/20(金) ◆第二期…1/14(火)～4/18(金) ※会期毎に展示資料が一部変更になります。

講演会・教育支援等

4月23日(火) 視聴覚教育メディア論A(三河内彰子先生)

インブリー館見学、所蔵資料「第千三百五十九号 私雇外国人居留地外僑寓証票」閲覧

5月30日(木) ゼミ見学(飯田浩司先生) 明治学院歴史的3棟見学、所蔵資料「白金學報」閲覧

6月11日(火) 視聴覚教育メディア論A(三河内彰子先生) 記念館(歴史資料館展示室)、礼拝堂見学

6月13日(木) ゼミ見学(小滝秀明先生ゼミ生) インブリー館見学

6月27日(木) 明治学院研究2(辻直人先生) インブリー館火災跡等を含む明治学院歴史的3棟見学

10月19日(土) 明治学院歴史資料館講演会「明治学院リードオルガンの響きとこれから」

(講師:加藤拓未氏、加藤万梨耶氏、演奏:原田真侑氏)

10月23日(水) ソーシャルワーク実習指導A(金圓景先生) 高齢者施設の方へ向けた歴史的建造物の紹介

11月1日(金)～3日(日) 視聴覚教育メディア論A、B(三河内彰子先生) 学生によるパネル展示

11月26日(火) 教職専門演習(石井久雄先生) 明治学院歴史的3棟見学、屋我良明氏寄贈資料「日本留学生証明書」等閲覧

12月12日(木) 明治学院研究3(辻直人先生) 御真影奉安所跡(現チャペルマイク室)を含む明治学院歴史的3棟見学

資料の受贈

山田幸信氏 山田幸三宛はがき 他22点

中谷眞康氏 大学紛争関係資料 50点

北村浩氏 海水館関係資料ファイル一括 他29点

田代則子氏 1963-1965年学生生活写真アルバム一括

松本智子氏 明治学院高等学部英文科卒業記念(昭和8年)アルバム

購入資料

◆島藤村短冊幅 「東に起き西にのぞみ南に居り北におもふ」

◆白金文學第二号

明治学院歴史資料館刊行物のお知らせ

『明治学院歴史資料館資料集』第21集「明治学院新聞」見出し目録 1933〔昭和8〕年～1982〔昭和57〕年
2025年3月刊行

本資料集には学生の編集による「学生新聞」を中心に、その前身となる「明治学院時報」等、学院で発行された複数の新聞(計391紙。一括して「明治学院新聞」としました)から、主だった見出しを目録化して収録しています。戦前(1923年、「時報」第2号)より戦後の学園紛争等の影響による「学生新聞」の終焉までの一連の流れを、第二部発行のものも含め、「見出し」からたどることができる一冊です。ぜひ手にとってご覧ください。

2024年度 明治学院歴史資料館委員

委員長 長谷川一 明治学院歴史資料館長(文学部)

委員 助川哲也 図書館長(国際学部)

中西公子 大学教員(文学部)

佐藤正晴 大学教員(社会学部)

植木献 大学教員(教養教育センター)

櫛田健一 法人職員(法人事務局)

鈴木直子 大学職員(図書館次長)

吉本絢香 高等学校教職員(高等学校教諭)

青野由美 中学校・東村山高等学校教職員

(東村山高等学校教諭)

歴史資料館

館長 長谷川一

特任研究員 細井守 眞島めぐみ

協力研究員 木村一 小暮修也 辻直人 松本智子

学芸員 亀元円

事務局 山田真嗣 三上耕一 小杉義信

明治学院歴史資料館 News Letter No.16

発行者 明治学院歴史資料館

発行日 2025年3月31日

〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37

電話: 03-5421-5170

E-mail: shiryokan@mguad.meijigakuin.ac.jp

WEB: <https://shiryokan.meijigakuin.jp>